

Nagahata, M., Onoda, M., Mito, E.,  
Harasawa, M., & Ishikane, H. (2015).  
Relationships between eating disorder tendency and body  
imaged-related size perception.  
Vision Sciences Society 15th Annual Meeting,  
St. Pete Beach, Florida, USA.

長畑 萌

Vision Science Societyは、視覚機能に関心を寄せる研究者が数多く所属する学術団体である。その年次大会には、視覚心理物理学、神経科学、工学、認知心理学といった多様な分野にわたり、各国から第一線の研究者たちが参加する。本年度の年次大会（以下、VSSと記載）は、平成27年5月15日から20日までの6日間、アメリカ合衆国フロリダ州セントピービーチにおいて開催された。筆者は昨年、一昨年に続いて3回目の参加であったが、今年は例年にない悪天候に見舞われた。空港からのバスでの移動に際しては、スコールのような土砂降りの雨に合い、会期中も例年に比べて湿度が高く、やや蒸し暑くフロリダらしからぬ気候であった。しかしVSSは例年どおりの賑わいで、最新の研究成果を数多く見聞し、また本センターの研究成果を広く示すことができた。

VSSでは知覚情報の神経伝達から、視覚対象認識、視覚情報を利用した運動制御、顔認識、視覚機能の発達、他感覚と視覚との統合、両眼視、視覚的記憶といった、近代の視覚科学のメインピックに関わる研究が多数報告される。また多様なトピックに関して、例えば視覚性注意であればメカニズムとモデル、注意制御、空間性注意、特定の対象やその特徴に対する注意というようにさらに詳細な分類に分かれており、密度濃く研究発表が取り上げられている。またニューロイメージングやコンピュータビジョン、認知心理学における新しい実験手法といった、最新の研究手法に関する話題も豊富である。数ある研究の中でとりわけ筆者の印象に残ったものは、自閉症者の実交流場面における視線移動の検討や、統合失調症者における画像観察時の視線移動と顕著性マップとの関連を検討した研究であった。モニタ上に呈示された顔刺激に対するものとは異なる視線移動が実交流場面においてみられたことは、実生活場面に近い状況での研究の必要性を示すものであり、精神疾患のエンドフェノタイプとなりうる指標の検討は、主観を

排した客観的な診断のために有意義である。どちらも臨床研究において重要なテーマである。

学会2日目の5月16日には、本プロジェクトにおける筆者の研究成果について発表を行った。発表の内容を以下に示す。

題目：Relationships between eating disorder tendency and body imaged-related size perception（ボディ・イメージに関連した大きさ知覚と摂食障害傾向との関連）

著者：長畑 萌，小野田美紀，水戸英一，原澤賢充，石金浩史

内容：体型に対する過剰な関心は、摂食障害の最も強力なリスクファクターの1つであると言われている。多くの先行研究において、摂食障害患者がボディ・イメージの障害を示すことが報告されているが、それが視覚情報入力の変容のためなのか、身体像の記憶の段階における変容のために生じているのかは明らかではない。先行研究において、摂食障害患者が記憶した身体像の過大評価を示すことが確認されている。しかし摂食障害の傾向が、ヒトの身体像の知覚にも影響を及ぼすのか否かは不明である。本研究においては、摂食障害傾向と身体像の視知覚との間に関連が見られるか否か検討を行った。実験参加者は、摂食障害の既往のない女子大学生・大学院生であった。参加者は、Eating Disorder Inventory-91（EDI-91）の得点の高低に基づき2群に分けられた。標準刺激として、やせ・標準体型・肥満の3種類の女性身体画像、身体画像と同じ大きさの黒く塗りつぶされた長方形を用いた。身体画像の臀部および、黒四角形の高さの半分に該当する位置には、白い線分を重ねた。比較刺激としては、白い線分のみを用いた。標準刺激と比較刺激とは、液晶モニタの左右に同時に呈示された。参加者に課された課題は、標準刺激の白い線分の長さと同様になるように、比較刺激の長さを調整することであった。標準刺激の線分の長さに対する、調整後の比較刺激の長さの占める割合を算出し、参加者の摂食障害傾向、刺激の種類、刺激の大きさの影響について分散分析で検討を行った。分析の結果、(1) 摂食障害傾向の低い参加者は、肥満体型の身体の場合のみ黒四角形に比して身体画像に重ねられた線分を過大評価したが、(2) 摂食障害傾向が高い参加者では、やせ・標準体型・肥満いずれの身体においても過大評価が見られ、また過大評価の割合は、身体画像の横幅が大きくなるにつれて増加した。これらの結果は、摂食障害傾向が身体画像の視知覚に関連することを示すものである。

以上が発表の内容である。摂食障害の身体認識に関しては、これまではボディ・イメージの文脈において研究がなされており、身体の視知覚に関して詳細な検討は行われていなかった。筆者の研究発表には20名近い研究者が訪れ、強い関心を示していた。このようにVSSに参加したことによって、本センターの研究成果を広く公表し、また他の研究者の発表から研究に有効な示唆を得ることができた。本プロジェクトにおける研究を進展させる上で、有益な学会参加であった。